

展示・収蔵品より

美を知る

308

企画展「昭和のアキタ」は、日常生活の道具から昭和の暮らしの変遷を紹介する展示である。内容は多岐にわたるが、ここでは女性と衣服に焦点を当て、暮らしと衣服の変化について考えてみたい。

大正から昭和の初めにかけて、女性の和服に西洋の柄が取り入れられたり、洋装化が進んだりした。これは女性の働く場が広がったこと、生活の改善と合理化のため政府や民間団体が洋装を推奨したことが影響している。

和服と異なり、洋服はさまざまな型紙を必要とする。和服と同様に単純な型紙で作ることができるよう工夫された「簡単服」と呼ばれる洋服が、子供服から普及した。

写真1は、昭和7(1932)年の『主婦之友』6月号の付録で、男女子供服の実物大の型紙である。日本に洋裁学校を普及させた1人である杉野芳子が考案した型紙で、できるだけ和服に近い直線縫いで仕上げられるよう工夫されている。当館職員が実際にこの型紙から子供服を作ったところ、現在でも見劣りしない斬新なデザインで、着やす

く工夫されていることが分かった。再現した服はぜひ展示室で見てください。

写真2は、秋田の民俗や考古学の研究者である武藤鉄城(1896~1956年)が、昭和17年に地元の角館近辺で撮影した。手前の子どもたちは下にモンペのようなものを着ているものの、上着は皆洋服である。対照的に後ろの女性たちは皆和服姿で、一番左の女性は角巻を羽織っている。他の写真を見ても子ども

の洋装が普及していたことが分かるが、成人女性は和服を着ることが多かったようだ。洋装は昭和の初めには暮らしに取り入れられつつあったが、戦争によってその流れはいったん否定される。昭和15年に国民服令が制定され、男性の国民服が定められた。国民服は軍服をモデルにし、外觀は洋服に近いものの、随所に和服の要素が盛り込まれた服である。

女性にも標準服なるものが考案されたが、あまり浸透せず、戦争の激化に伴い動きやすいモンペが普及していった。このモンペが戦後の女性たちにズボンを受け入れるきっかけをつくったとも言われる。当時は物資が乏しく、一家の衣と食は女性の手で賄い、かつ家計を支える必要があったため、女性の服装にも動きやすさが求められたからである。

写真3は昭和23年、秋田銀行が行った「福德定期預金」の案内チラシ。1口千円で預金すると景品が当たる抽せん券がもらえる。特賞が訪問着やたんす、電気ミシン、針箱とい

企画展「昭和のアキタ」

暮らしと共に変わる服



写真2

集合写真(武藤鉄城撮影、提供・金澤世津子氏)



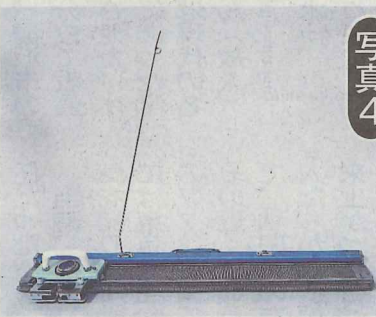
写真5

井戸端会議(昭和32年、越前谷国治撮影、提供・越前谷潔氏)

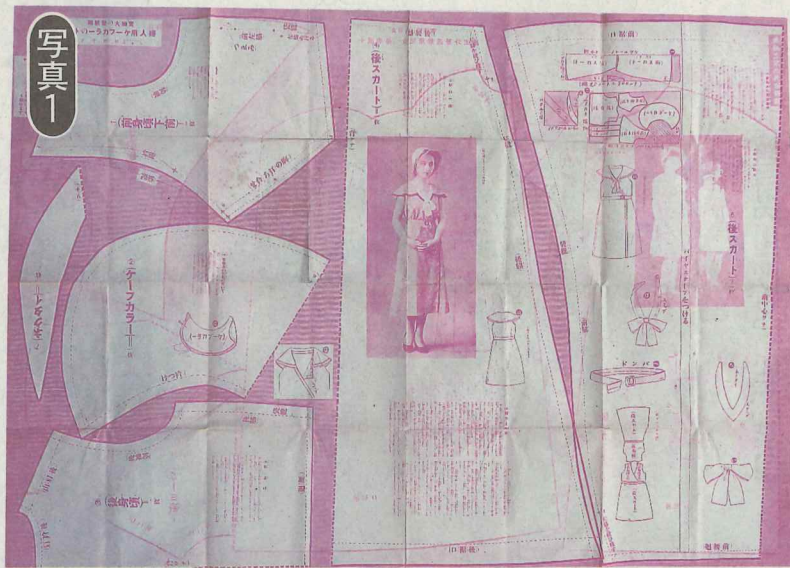
った花嫁道具なのが興味深い。当時は女性が職を得るための手段として洋裁の技術が重要となり、各地で洋裁学校が繁盛した。戦前から手回しミシンが普及していたが、電気ミシンは相当画期的だったのだらう。昭和30年代になると、ミシンの他に毛糸が編める家庭用編み機(写真4)が花嫁道具の一つに加わっていく。

写真5は昭和32年の秋田市内の風景である。女性たちは皆洋服だが、げたを履いている人もいる。この頃になると、夏場は洋服を着る人が大半で

写真4



機械編み機 幅100センチ×奥行20センチ、糸取り棒の高さ69センチ(最大) 当館蔵



子供服の型紙(昭和7年『主婦之友』6月号付録) 縦78センチ×横108.5センチ NPO法人秋田歴史文化伝承会蔵



写真3

第7回福德定期預金御案内チラシ(昭和23年) 縦14センチ×横20.2センチ NPO法人秋田歴史文化伝承会蔵

×五 県立博物館開館50周年企画展「昭和のアキタ」百年のくらしをつづる」は26日(6月15日)まで。歴史的出来事や生活様式の変化を、暮らしの道具を通じて紹介する。開館時間は午前9時半〜午後4時半。入場無料。月曜日は休館。4月29日は午後2時からダースコちんどん隊(湯上市)が館内でパフォー

マンスする。同館☎018・873・4121